

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330129

研究課題名（和文） 国際比較調査の方法論的研究

研究課題名（英文） A Methodological Study in Cross-National Comparative Surveys

研究代表者

真鍋 一史（MANABE KAZUFUMI）

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：90098385

研究成果の概要（和文）：

現在、世界の多くの国ぐにで、質問紙法にもとづく大規模な国際比較調査が実施されるようになってきた。国際比較調査では、調査を実施するそれぞれの国において、調査の「等価性（同一性）」を確保することが重要である。この研究では、このような視点から、欧米と日本の代表的な国際比較調査を取りあげ、それらの方法論的な問題の所在を明らかにするとともに、それらの解決策についての提案を行なった。併せて、このような国際比較調査を支援するインフラストラクチャー（研究機構）のあり方についても検討した。

研究成果の概要（英文）：

In recent years, a variety of large-scale cross-national comparative surveys are being conducted in many countries. The most important task of these cross-national surveys is to develop the measurement equivalence in comparing nations. In this comparative and collaborative study, we have conducted methodological examinations of these cross-national surveys from a comparative perspective, and have explored specific strategies for the development of comparative surveys. We also have explored the development of infrastructure for supporting such survey activities of cross-national comparison.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	6,500,000	1,950,000	8,450,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：国際比較調査、方法論、等価性、データ・アーカイヴ

1. 研究開始当初の背景

現代の社会科学にとって、最も大きな出来事の 1 つをあげるとするならば、それは質問紙法による多数の国ぐにを対象とする大規模な国際比較調査の出現ということであろう。

近年、各国で国際比較調査が活発に実施されるようになってきた。しかし、それにもかかわらず、このような国際比較調査の方法論的な諸問題について、体系的に検討する試みは、いまだ十分になされていないのが現状であ

る。

2. 研究の目的

近年、世界の国ぐにで実施されるようになってきた国際比較調査についての方法論的研究を通して、この研究領域に新しいブレイクスルーをもたらすことをねらう。それは、基本的には、国際比較という社会科学の営みに「日本からの独自の視座」を導入し、それを踏まえて比較の等価性を再検討するという試みが、1つの突破口になるという考え方にもとづくものである。

3. 研究の方法

(1) 欧米の文献にもとづいて、国際比較調査の方法論的問題の体系的な整理を試みる、
(2) 日本の国際比較調査が雛形としてきた欧米発の国際比較調査（「ヨーロッパ価値観調査」「世界価値観調査」「国際社会調査プログラム」「職業とパーソナリティ国際比較調査」）に固有な方法論的問題に関する事例研究を行なう、(3) 日本発の国際比較調査（「アジア・バロメーター調査」「日本語観国際センサス」「東アジア価値観国際比較調査」「価値観と宗教意識国際比較調査」）に固有な方法論的問題に関する事例研究を行なう、という3つがここでの研究方法である。さらに、以上の3つの方法をとあわせて、このような国際比較調査の研究を可能にする「国際比較調査データの共同利用のための環境整備に関する研究」も行なう。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

i) 国際比較調査における「等価性 (equivalence)」をめぐる諸問題の所在が明らかとなった。これらの諸問題は、つぎのように分類・整理される。

- ① 調査票 (questionnaire) の質問諸項目 (question item = measurement instrument) の等価性に関する諸問題
これらの諸問題は、「被調査者の個人的属性や社会的環境に関する質問項目の諸問題」と「被調査者の意見・態度・行動、そしてそれらの背後にあると考えられる価値観に関する質問項目の諸問題」に分けられる。
- ② 質問項目 (の意味) に対する社会の変化の影響に関する諸問題
- ③ 質問項目の翻訳に関する諸問題
- ④ 調査データの分析方法に関する諸問題

ii) この共同研究では、このような諸問題を克服し、等価性を確立するための諸方法を検討した。ここでは、「質問諸項目の等価性」に焦点を合わせた。

- ① 国際比較調査では、研究対象である「文化

／地域／国家」についての専門家と、研究方法である「調査方法／データ分析方法」についての専門家、の両者の研究活動への参加が不可欠といえる。このような検討は、いわゆる「研究運営論」「研究経営論」という視座の重要性を示唆するものといえる。

- ② 質的アプローチの国際比較調査への援用
- ③ 質問文のワーディングの改良
- ④ レスポンス・スタイルにおける文化差の克服
- ⑤ 翻訳技法の開発——「逆翻訳」「脱中心化」など——
- ⑥ ファセット・アプローチ (Facet Approach) の援用

以上は、現在、世界の国ぐにで実施されているさまざまな国際比較調査に共通に見られる一般的な問題であり、その克服のための方法論的な提案である。

この共同研究では、このような一般的な議論と並行する形で、「3. 研究の方法」のところであげた8つの個別の国際比較調査を取りあげて、①それぞれの国際比較調査の「実施の経緯」「調査の方法」「質問の内容」、②方法論的工夫と残された問題、③主要な知見とその意義、④データ・セット利用の解説、の4点についてのまとめを行なった。

iii) 以上の研究成果に加えて、このような「国際比較調査データの共同利用のための環境整備に関する研究」も行なった。国際比較調査データは、そのような調査に関心をもつすべての人びとによって利用可能なものとならなければならない。このような考え方を実現してきたのが、いわゆる「データ・アーカイヴ」の設立とその運営である。その代表が米国ミシガン大学の ICPSR とドイツ・ケルン大学の ZA である。この共同研究では、2つの代表的なデータ・アーカイヴの歴史と現状に関する研究を踏まえて、日本におけるデータ・アーカイヴのあるべき姿について、つぎの4つの側面から検討した。

- ① データ・アーカイヴは「集中型」であるべきか、それとも「分散型」であるべきかという議論がある。これまでのデータ・アーカイヴの歴史の検証から、世界中のデータを1つの「世界センター」のようなところに集中させるよりも、それぞれの国に複数のデータ・アーカイヴを分散させ、それらの中で相互にデータのやり取りをする協力・共同活動の方式の方が望ましいといえる。
- ② データ・アーカイヴに蓄積されるデータは「公共財 (無償で利用できる)」と考えるべきか、それとも「利潤を生み出す資本 (利

用に当たっては受益者負担が原則)」と考えるべきかという議論がある。日本の現状では、どうしても公共財としての考え方を取り入れる必要があるのではないだろうか。

- ③データ・アーカイブを単独の機関とするか、それとも「社会調査の実施」「調査データの分析」を含めて3つの機能の統合体とするかという議論がある。やはり3つの機能を盛り込んだ「社会調査のインフラストラクチャー」というのが、今後の望ましい形態といえよう。
- ④データ・アーカイブは、国際化の時代にどう対応していくべきかという議論がある。現在、世界の国ぐにで、日本の実証的な調査研究に対する関心が高まっている。ところが、海外からの日本の調査データへのアクセスについては、使用言語をどうするかという問題が残されたままとなっている。グローバル化の進展に伴って、日本においても英語化が避けられない方向となってくるであろう。

以上の研究成果については、これらをまとめて、『国際比較調査の方法と分析』と題する単行本として出版することを計画し、現在、共同研究のメンバーがそれぞれのテーマで原稿執筆を進めているところである。

(2) 研究成果の国内外における位置づけとそのインパクト

研究組織については後述するが、共同研究のメンバーはそれぞれ独自に学術論文・著書を発表するとともに、国内外のさまざまな学会において、研究発表を行ない、国際比較調査という研究領域において文字どおり「フロンティア」あるいは「パイオニア」としての役割を果たしてきている。

ここで特筆すべきは、「2. 研究の目的」のところ述べて「国際比較という社会科学の営みに『日本からの独自の視座』を導入することによって、この研究領域にブレイクスルーをもたらす」という方法論的な戦略が国際学会の舞台で見事に結実したということである。その一例として、研究代表者の発表事例を紹介しておきたい。国際比較調査の研究で、現在、世界で最も注目されている学会の1つが「ヨーロッパ社会調査学会(The European Survey Research Association: ESRA)」である。研究代表者は、共同研究の期間中、2009年(ポーランド・ワルシャワ大学)と2011年(スイス・ローザンヌ大学)の2回、「国際比較調査の方法論的課題——価値観と宗教意識に焦点を合わせて——」と題する研究発表を行なった。その要旨は、①ポストモダンの時代を射程に入れたさまざまな理論の構築が図られながら、それらの理論を実証的

に検証する試みは体系的になされていない、②大規模な国際比較調査が実施されるようになってきたにもかかわらず、世界の研究の現状は、例えばアジアの国ぐになどを射程に入れた概念や理論の再検討にまでは至っていない、という問題点の指摘と、その解決のための方法論的な提案であった。この研究発表は、米国シカゴ大学のTom Smith教授に注目され、「ヨーロッパ社会調査学会」の枠を超えて、広くWorld Academic Communityに紹介されることになった。

ここで特筆すべきもう1点は、同じ問題関心から研究代表者は、ドイツ・ケルン大学のWolfgang Jagodzinski教授と「国際社会調査プログラム」の設立25周年記念論文集(Routledge, 2009)に”On the Similarity of Religiosity in Different Cultures”と題する論文を執筆したが、この論文集はアメリカ社会学会の国際比較社会学部門において「最優秀出版賞(Best Publication Award)」を受賞することになったということである。これは、国際比較調査という試みが、社会科学の領域において、今や不動の地位を獲得したということを示すものといえよう。

(3) 今後の展望

これまでの研究を踏まえて、国際比較調査の方法論的課題は、分析に取りあげる国ごとに異なるものであることが明らかになってきた。そこで、今後の研究の方法論的戦略の1つとして、特定の2国間あるいは数か国間に焦点を合わせて深く検討を進めていくという方策が提案される。もう1つは、研究の形態に関する提案であり、国際比較研究というものがinterdisciplinaryであるとともに、collaborativeであることが求められる知的営為であるということである。こうして、現在、日本・ドイツ・スウェーデンに比較の視座をしぼった「価値観と宗教意識」に関する国際共同研究を計画しているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

連携研究者と研究協力者が参加する形で、現在、『国際比較調査の方法と分析』と題する単行本の出版が計画されている。したがって、ここでは、研究代表者の研究業績に限って報告する。それは、雑誌論文21篇、学会発表15回、図書(分担執筆)4篇、というものである。

〔雑誌論文〕(計21件)

- ①真鍋一史、国際文化交流機関の評価に関する研究——国際交流基金の「日本語教育事業」の評価調査——、関西学院大学先端社

- 会研究所紀要、査読無、7号、2012、67-97
- ②真鍋一史、社会科学はデータ・アーカイブに何を求めているか、社会と調査(社会調査協会:有斐閣)、査読無、8号、2012、16-23
- ③真鍋一史、文化事業の社会的インパクトとその評価の測定、青山総合文化政策学、査読無、4号、2012、1-16
- ④真鍋一史、Social Research and Social Theory、関西学院大学社会学部紀要、査読無、114号、2012、187-198
- ⑤真鍋一史、Toward the Integration of "Theory" and "Research" in the Study of Religion、青山スタンダード論集、査読無、7号、2012、283-298
- ⑥真鍋一史、ポストモダンの社会における宗教の変容——スウェーデンにおける事例研究——、関西学院大学先端社会研究所紀要、査読無、6号、2011、65-76
- ⑦真鍋一史、国際文化交流機関の評価に関する研究——国際交流基金の「文化芸術交流事業」の評価調査——、関西学院大学社会学部紀要、査読無、113号、2011、13-34
- ⑧Sven Holst、真鍋一史、ドイツのマス・メディアにおける日本イメージの構築、関西学院大学先端社会研究所紀要、査読無、5号、2011、47-64
- ⑨真鍋一史、L. ガットマン、社会と調査、(社会調査協会:有斐閣)、査読無、6号、2011、95
- ⑩真鍋一史、世論調査の発展の新しいエポック、世論調査協会報、査読無、107号、2011、1
- ⑪真鍋一史、宗教性の諸相とその構造の国際比較、関西学院大学社会学部紀要、査読無、111号、2011、159-176
- ⑫川端亮、真鍋一史、国際文化交流機関の評価方法開発研究における諸方法(III)、関西学院大学社会学部紀要、査読無、110号、2010、33-46
- ⑬真鍋一史、欧米社会学における宗教理論と宗教調査、関西学院大学先端社会研究所紀要、査読無、4号、2010、1-20
- ⑭真鍋一史、ヨーロッパ価値観調査——価値観の収斂と拡散を探る——、社会と調査、(社会調査協会:有斐閣)、査読無、4号、2010、84
- ⑮真鍋一史、宗教意識の構造——日本とドイツにおける国際比較——世論調査協会報、査読無、105号、2010、3-10
- ⑯真鍋一史、日本における世論調査、サーベイ・リサーチとそのインフラストラクチャー、青山総合文化政策学、査読無、2号、2010、1-16
- ⑰真鍋一史、The Structure of Religiosity: A Cross-National Comparison of Japan and Germany、法学研究(慶應義塾大学)、査読無、83巻2号、2010、455-500
- ⑱真鍋一史、国際文化交流機関の評価手法開発研究における諸方法(II)、関西学院大学社会学部紀要、査読無、109号、2010、1-22
- ⑲真鍋一史、国際文化交流機関の評価手法開発研究における諸方法(I)、関西学院大学社会学部紀要、査読無、108号、2009、75-84
- ⑳真鍋一史、国際文化交流機関の評価に関する研究、青山総合文化政策学、査読無、創刊号、2009、7-44
- ㉑真鍋一史、宗教意識の構造——日本とドイツにおける国際比較——、関西学院大学社会学部紀要、査読無、107号、2009、49-71
- [学会発表](計15件)
- ①真鍋一史、The Utility of Smallest Space Analysis for the Cross-National Survey Data Analysis、日独分類学会、2012年3月10日、同志社大学
- ②真鍋一史、質問紙調査のデータ解析における「森を見る」方法の有効性、日本分類学会、2012年3月8日、同志社大学
- ③真鍋一史、Theories and Researches in Western Sociology of Religion: Otherness in the Study of Religion、European Survey Research Association (ESRA)、2011年7月21日、スイス・ローザンヌ大学
- ④真鍋一史、北欧諸国における宗教の変容——スウェーデンにおける事例研究——、「宗教と社会」学会、2011年6月11日、北海道大学
- ⑤真鍋一史、欧米社会学における宗教理論と宗教調査——その統合と国際比較の視座から——、関西社会学会、2011年5月28日、甲南女子大学
- ⑥真鍋一史、ISSP2008調査データの2次的分析、日本社会学会、2010年11月6日、名古屋大学
- ⑦真鍋一史、「次元の確定」という視座からのデータの分類、日本分類学会、2010年7月31日、青山学院大学
- ⑧真鍋一史、Religiosityの探究、「宗教と社会」学会、2010年6月5日、立命館大学
- ⑨真鍋一史、質問紙調査のデータ解析における問題点とその解決策、関西社会学会、2010年5月30日、名古屋市立大学
- ⑩真鍋一史、国際文化交流機関の事業評価調査のデータ解析、日本分類学会、2010年2月19日、九州大学
- ⑪真鍋一史、Methodological Discussions on the Survey of Environment and Health、アジア・パロメーター国際会議、2009年

- 11月16日、東京大学
- ⑫ 真鍋一史、アジア・バロメーターをめぐる方法論的な議論、東方学会、2009年11月6日、日本教育会館
- ⑬ 真鍋一史、宗教意識の構造——日本とドイツにおける国際比較——、日本社会学会、2009年10月11日、立教大学
- ⑭ 真鍋一史、日本と欧米のサーベイ・リサーチとデータ解析、日本行動計量学会、2009年8月5日、大分大学
- ⑮ 真鍋一史、Translation Problems in International Surveys、European Survey Research Association (ESRA)、2009年6月30日、ポーランド・ワルシャワ大学

[図書] (計4件)

- ① 真鍋一史、丸善出版、統計応用の百科事典 (分担執筆)、2011年、700 (334-335)
- ② Wolfgang Jagodzinski、真鍋一史、Routledge、The International Social Survey Programme, 1984-2009 (分担執筆)、2009年、470(313-336)
- ③ 真鍋一史、明石書店、アジア・バロメーター：南アジアと中央アジアの価値観 (分担執筆)、469 (387-406)
- ④ 真鍋一史、Springer、Cooperation in Classification and Data Analysis (分担執筆)、2009年、208 (197-204)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真鍋 一史 (MANABE KAZUFUMI)
青山学院大学・総合文化政策学部・教授
研究者番号：90098385

(2) 連携研究者

猪口 孝 (INOUCHI TAKASHI)
新潟県立大学・国際地域学部・教授
研究者番号：30053698

吉野 諒三 (YOSHINO RYOZO)
統計数理研究所・調査科学研究センター・教授
研究者番号：60220711

川端 亮 (KAWABATA AKIRA)
大阪大学大学院・人間科学研究科・教授
研究者番号：00214677

米田 正人 (YONEDA MASATO)
国立国語研究所・名誉所員
研究者番号：20000432

菅野 剛 (SUGANO TSUYOSHI)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：10332751

吉田 俊六 (YOSHIDA SHUNROKU)
富山大学・名誉教授
研究者番号：90300110

荻野 昌弘 (OGINO MASAHIRO)

関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90224138

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30261564

中野 康人 (NAKANO YASUTO)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：50319927

(4) 研究協力者

山崎 聖子 (YAMAZAKI SEIKO)
一橋大学大学院・国際経営戦略コース・客員准教授

荒牧 央 (ARAMAKI HIROSHI)
NHK放送文化研究所・世論調査部・副部長

小堀 真 (KOBORI MAKOTO)
日本大学・文理学部・研究員

Ulrich Moehwald
中部大学・国際関係学部・教授

Sven Holst
福岡女子大学・国際文理学部・准教授

Wolfgang Jagodzinski
ドイツ・ケルン大学・データ・アーカイブ・分析研究所・教授

Jonas Edlund
スウェーデン・ウメオ大学・社会学部・教授